AS好きな俺が艦これ世界に転生、提督になったのだがどうしてこうなった？

アインスト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、タイトルこそ現在執筆中の作品に似ていますが別物です（・ω・）

要約すると、ある日主人公が死亡、その後転生、それから色々な面倒事に巻き込まれて成長し最終的に”どうしてこうなった?”で終わるような感じの二次創作作品です（・ω・）

よろしければどうぞ（；∀）

目次

Duel. 0　始まりのスタンドバイミー　1
Duel. 1　スタンドアローン　9
Duel. 2　危険なアドミラル　17
Duel. 3　セーブ・ザ・ライフ　26
Duel. 4　バトルシップの由縁　36
Duel. 5　下されるジャッジメント　46
Duel. 6　トーキング・フォー・ミー　57
Duel. 7　ビッグ7のプライド　65

Ｄｕｅｌ．０　始まりのスタンドバイミー

普段通りの朝。
普段通りの朝食。
普段通りのニュース。
普段通りの日常。
俺は、そんな日常がずっと続くと思っていた。
だが、現実は甘くはなかった。
それはいつも通り起きて、会社が休みだった日のこと。
唐突だが俺はＡＳ（アーム・スレイブ）が好きだ。
ＡＳとは何ぞや？
かの小説、”フルメタル・パニック!”という作品に登場する全長八メートル程のロボットだ。
それで戦争をしている主人公たちや、日常生活から非日常に巻き込まれてしまうヒロインの心情を描いた素晴らしい作品だ。

そのＡＳの最新プラモデルが発売していたので買いに行った帰りのことだ。

「ふぃー……まさかレーバテインがこんな田舎街のプラモ屋に売ってるとは……ついアーバレストも買っちまった……」

そんな事をのたまいながらゆっくりと帰路につこうとしていた。

普段通りなら、普通に帰っていた。

だが、その日はそうはさせてくれなかった。

日中ではあり得ないだろう。

後にわかった事だが飲酒して暴走した車両による事故に巻き込まれたのだ。

さて、何故巻き込まれた事がわかったか、だが。

それは、どういうわけか、薄れ逝く意識の端で、事故に遭ったであろう女性が大丈夫ですか、と叫びながらこちらに走ってきていたのと、事故を起こしたであろう男性が呆然と見ていたのを判断し、あぁ、俺は事故に巻き込まれたのか、と見当がついたのだ。

なんだか下半身の感覚がないな、上半身の感覚が薄いな、と思いながら自分を見ると、そこには下半身を失い、傷だらけの上半身があった。

「(――――あぁ、致命傷か。楽に逝けるかな――――?)」

そんな馬鹿な事を考えながら、俺は意識を暗い暗い闇の底に沈めてしまった。

次に目が覚めた時、俺は見知らぬ機械の中にいた。
第一印象はとにかく狭い。
だが、この場所には何故か見覚えがある。
ここは確か――――と、思い出そうとした矢先にこの場所で独特な声が響く。

『お目覚めですか、軍曹』
「軍、曹……?俺が?」
『肯定』
「いくつか……聞きたいことがある。俺は……誰だ?」
『貴官は”相良　宗介”軍曹です』

「俺が……相良、か」

どうやら、見た目も相良軍曹そっくりらしい。
まずは――――どうしてそうなった。
俺は普通のモブのはずだ。
それがどうした、主人公並のルックスを手に入れていた。
これなんてエロゲー？
まぁいい、とりあえず現状把握だ。

「……とりあえず、お前は？」
『コールサインは”アル”です。軍曹』
「アル、か。ではアル、ここは何処だ？」
『”ＡＲＸ―７　アーバレスト”のコックピットです』
「では本機は何処に位置している？」
『海です』

「は？」
『ですから、海です。軍曹』
「……まさかど真ん中とか言わないだろうな」
『残念ながらその通りです。軍曹』
「……なんてこった」
『現状、”ラムダ・ドライバ”によりどうにか海面で浮いている状態です』
「なに？ラムダドライバ？」
『肯定。本機はラムダドライバ搭載機です』
「いや、それはわかる。だが何故ラムダドライバが起動している？」
『それは恐らく軍曹が無意識下で起動させているのかと』

なるほど、な。
とりあえずは次の通りか。
その壱、今俺はリアルにアーバレストに乗っている。
その弐、相良宗介そっくりにされた。
その参、アルがいる。

その肆、何処の海かは知らんがど真ん中にいる。
その伍、これが極み付けだ。なんとラムダドライバを発動出来ている。
……やっぱいな。
どんなチートだよ。
……まぁ、当面の目的は陸地だな。
陸地を目指して進むしかないな。
とりあえず武装を確認するか。

「アル、本機に積まれている武装はどうだ？」
『本機には頭部チェーンガン、対戦車ダガー、グレネード、左脚部に単分子カッター”ＧＲＡＷ―２”マウント、腰部に”ＧＥＣ”アサルトライフルマウント、右腕にボクサーを装備しています。残弾はモニターを参照してください』
「ほぼフル装備か……よく浮けたな」
『ラムダドライバのおかげでしょう』
「それも、そうだな」

さて、ゆっくりと確認しながらまずは日本が何処にあるのか調べないとな――と考

えたその時。
アルが警鐘を鳴らした。
『警戒、敵距離４５数３、本機から４時の方向』
「……休ませてはくれないか」

そう言って機体を４時方向に向ける。
そこには、異形がいた。
二匹は魚をそのまま大きくして禍々しくした見た目。
もう一匹、いや一人は腰から尻尾を生やしている。
その尻尾の先にはやはり禍々しく、口の中に砲身があった。
……まさかこいつら……！
「深海、棲艦……！」
『敵、なおも接近。来ます、軍曹』
「――――くそっ！」

そう悪態をついてアーバレストはボクサーのハンドガードを力強く引き、弾を込めて迎撃準備を整えた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

Duel・1　スタンドアローン

「さぁ……どうくる？」
『敵目標をα、β、γと仮称。恐らくγが隊長かと』
「ならばまずは出方を見る！」

海面を走りながら様子を見る。
しかしラムダドライバには本当に驚かされる。
水上歩行をいとも簡単に……。
そんな事を考えているとアルから報告を受ける。

『敵、こちらをロックしています。弾道予測』
「アル、ラムダドライバで弾をはじけるか？」
『現状ならば可能かと』
「よし、やるぞ」

『ラージャ』

ラムダドライバはイメージだ。
イメージを強く――――！
盾、それも何物も受け付けない絶対的な盾を――――。

「シズメ・・・・・・！」

γが砲身を向けて砲撃する。
来たか・・・・・・上手くいってくれ！
その時、パァンッ、と破裂音がした後、砲弾であろう物が海面に落ちる。

「上手く・・・・・・いったのか？」
『成功です。軍曹』
「よし、反撃するぞ！」
『ラージャ。目標捕捉、ロック完了』
「今度は攻撃に転用させる――――ぶち抜けぇ!!」

今度はさらに強く、何物も撃ち貫く弾丸をイメージする。
そして、砲身だけを狙い、引き金を引く。

「グアァッ!?ナニガ――――!!」

ヤツの砲身はもうダメだな。
仕返しと言わんばかりに二匹が突撃してくるがだいぶ慣れた。
対戦車ダガーを二本取り出し、寸分違わずに砲身に直撃させ、暴発。
暴発の勢いで奴らは沈んだようだ。
残るは一人。さて、ゆっくりと話を聞くとするか。

『初めての戦闘でよくやりますね、軍曹』
「なに、お前の補助あっての実力だ。俺はまだまだだ」
『ですが称賛に値します』
「誉めすぎも良くないぞ、アル」
『ラージャ』

「さて、と――――おいそこ！・聞こえているな？・」

砲身を破壊された女に向かって話しかける。

女は初めこそ抵抗的な素振りを見せたが、ボクサーを突きつけると抵抗する素振りはなくなった。

・・・・・・我ながら下衆いな。

俺も落ちぶれたものだ・・・・・・。

「ナニガ、モクテキ？」

「なに、いくつか質問があるだけだ。まずお前は誰だ」

「・・・・・・ワタシニ名前ナンテナイ。タダ、人間カラハ”戦艦レ級”トヨバレテイル」

「”戦艦レ級”、か。ではレ級、ここは何処だ」

「ワタシガシッタコトカ。ソレヨリモオマエコソ名ヲ名乗レヨ」

「俺はまだ無所属だが、相良　宗介だ。階級は軍曹、コールサインはウルズＶＩＩだ」

「オマエモ、何処ニモツイテナイノカ。ワタシト同類ダナ」

「お前と同類だと？」

「ワタシハ見捨テラレタノサ。アマリ戦果ヲアゲラレテナイカラナ」

「だから俺を討ち取って手柄を立てようと？」
「アア、ダガモウイイ。見エナイ壁を使ウオマエニハ勝テナイダロウカラナ」
「ずいぶんとあっさり引き下がるんだな」
「オカシイカ？」
「いいや……アル、どう思う？」
『彼女は恐らく本当に引き下がっているのかと。何が狙いなのかは掴めませんが』
「オマエ、陸を目指シテルンダロ？ワタシガ案内シテヤルヨ」
「……どうする？」
『ここで立ち往生するのも否めません。彼女に案内してもらった方が良いかと思います、軍曹』
「信用できるか？」
『半信半疑ではありますが信用に値するかと』
「……わかった。頼む」
「取引成立ダナ。ツイテコイ」
「了解した」
「……ダガ、最近の艦娘は妙ダ」
「……艦娘？」

一応知らないふりをして訪ねてみる。
艦娘については知っている事はある程度聞いた。
どうやらこの近くに鎮守府があるそうだ。
案内しているレ級いわく、”最近の艦娘はボロボロなヤツが多い”そうだ。
表情もあまり良くないらしい。

「しかし良いのか、そんなにベラベラと話して」
「言ッタダロ、ワタシハ見捨テラレタンダ。シバラクハ近クノ無人島トカデ静カニ過ゴスサ」
「見つからない保証は？」
「サァテネ？下手踏メバ沈メラレテシマウカモナ？」
「……怖くはないのか」
「ナーニ、”マタ”沈ムダケダ。ソノウチケロット出テクルカモナ。記憶ハ消エルガナ」
「……そうか」
「ワタシモ柄ジャナイナ。誰カニベラベラ喋ッタ事ナイハズナノニ」
「……またいつか、会えるか？」

「知ラン。ダガ忘レルナ、ワタシハイツモオマエヲ見テイルカラナ」
「……ああ」
「サテ、ココマデダ。後ハ自分デ行ケヨ」
「……ああ」
「――ジャア」

またな、ありがとう、と言い残して彼女は何処かへ去っていった。
視線を戻すと、どうやら本当に鎮守府の近くまで送ってくれたようだ。
……行こう。
話をすれば保護してくれるかもしれない。

――だが。
この時の俺はまだ、滲む悪意に気づけずにいた。
さらに言えば、俺を見た少女がいたことも、気づけずにいたのだった。

「あれは・・・・・望むだけ、無駄かな。私たちを助けてくれる訳、ないよね・・・・・」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

Ｄｕｅｌ．２　危険なアドミラル

「ここが鎮守府か……」
『軍曹、所属不明の物体が複数接近。距離２０』
「お迎えか？」
『そのようですが、私から見ても妙です』
「妙？」
『はい。それが――――』

――――何故か、傷だらけなのです。
と、アルは淡々と述べた。
確かに……よく見ると小破、中破しているようだ。
何故修理をしていない……？
そこまで資材が足りないのか？

そう考えを巡らせていると、一人の少女から声をかけられる。

「そ、そこの巨人さん、止まってください！」
「呼び掛けに応じない場合はう、撃つぞ！」

――――震えている。
無理もない、自分の何倍もある奴を目の前にしているんだ。
当然の反応だろう。

「了解した。元よりこちらに戦意はない。ここの責任者と話があってきたのだ」
「話を・・・・・？わかりました、先導します。ついてきてください」
「了解した」

四人の少女が先導し、その後に続く。
そういえばラムダドライバをずっと使用しているが冷却は大丈夫なのか・・・・・？
とりあえずアルに聞いてみた。

どうやら必要最小限のラムダドライバを使用しているため、現時点では冷却は必要ないそうだ。

必要最小限のラムダドライバ起動で浮けるのか……ひとつ勉強になったな。

「ここです」
「了解した。アル、コックピット開放」
『ラージャ』
「モードマスター2で待機だ。何かあればお前の意思で動け」
『了解です、軍曹。そちらも何かあればインカムにて通信を』
「了解だ。では行ってくる」
『ご無事を』
「ああ」
「あ、あの」
「ん、すまない。俺は相良宗介。階級は軍曹だ。よろしく頼む」
「あ、はい。私は吹雪と申します。その、すごいですね、”それ”」
「アルの事か？」

「はい。まるで人とお話してるみたいに……」
「まぁな。アルは俺の最高の相棒だ。いつもアイツに助けられている」
「では、こちらです。どうぞ」

玄関を通され、エントランスのような場所に出た。
だが……何と言えばいいのだろう。
ろくに整備されていないのか、所々ボロボロだ。
その事を聞くと苦笑いしながらそうですね、と答える吹雪という少女。
彼女らも苦労しているのだろうか。
すると、一際豪勢な扉の前に着いた。

「ここだけずいぶんと豪勢だな？」
「……はい。ここが提督のお部屋ですから」
「他はこうじゃないのか？」
「ええ、まぁ……私たちは〝兵器〟ですから……」

悲しげな表情で語る吹雪。
何か、あったのだろうか。
可憐な少女が自らを”兵器”と言うとは……。

「あの、くれぐれもご無礼のないようにしてくださいね。お願いします」
「了解した」
「じゃあ、行きましょう……提督”様”、失礼します。吹雪です」
《おう、入れ。何の用だ》
「提督様にお話があるとお客様がいらっしゃられています」
《……わかった、入れろ》
「はい……」

吹雪が扉を開け、中へと案内される。
入った先には……なんだこいつは。
横に太いただの豚ではないか。
サイズがギリギリなのか、ややパツパツと服が張っている。
まさにふんぞり返っているだけのような男にしか見えん。失礼だがな。

歳は大体３０から３５くらいか。
しかしこいつが提督、か。
……まぁ、話を聞かせてもらおう。

「俺がここ佐世保第二鎮守府の提督、野村修だ。貴様は？」
「は、自分は相良宗介、軍曹であります。提督殿」
「あの妙な機械に乗っていたのも貴様か？」
「肯定であります」
「ほぉ……で、話とは何だ？」
「は、自分とあの機体をしばらくここに置いていただきたいと思い、許可を得るべくここに」
「なるほど、まぁいいだろ。お前は使えそうだしな」

どうやら許可を得られたようだ。
話を少しずつ進めていくと、やや長身な女性が少々慌てた様子で入ってきた。

「て、提督！大変です！」

「何だ大淀、話を邪魔するのか？あ？」
「い、いえ……ですが緊急の報告が……」
「……まぁいい、報告しろ」
「は、はい……実は、敵艦隊がこちらに向かっているとの情報が……」
「数は」
「戦艦が2、軽巡洋艦及び重巡洋艦がそれぞれ1、駆逐艦が2です」
「……ちっ、めんどくせぇな……」
「いかがいたしましょう……？」
「あー……確かまだ第六駆逐艦隊がいたよな？」
「は、はい……ですが中破状態で戦えるかどうか……」
「そいつらを囮に使え。鎮守府から引き離しちまえばどうとでもなる。お目付け役に天龍と龍田もつけりゃいいだろ」
「そ、そんな！それでは大破どころか撃沈されて……！」
「兵器が人間様に口答えするな！やれと言ったらやれ、いいな！」
「はい……」

今こいつは何を言ったんだ？

囮に？
中破状態の少女を出すと言ったのか……!?
馬鹿な事を!
そんな事をすればどうなるかわかっているはずだ……!

「すまんな、見苦しい所を見せて。とりあえず貴様はゆっくりしていくといい」
「――――馬鹿げている!貴方はそれでも提督か!?」
「馬鹿げているだと?普通だろうが。少しでも資材の消費を抑えるために心を痛くしてまでやってやってんだぞ?」
「だからといって傷だらけの少女を出しますか!?」
「御国の為に沈めるんだ、光栄だろが。それにたかが兵器、替えはいくらでも利くんだよ」
「くっ……!」

話にならん……!
つい俺はその部屋を飛び出してしまった。
窓を見ると恐らく指令を受けた艦隊が出撃している場面が見えた。

マズイ！

「アル！聞こえているな！」
『ええ、全て聞こえています。ひと暴れしますか、軍曹？』
「当然だ！彼女らを見捨てられん！」
『了解、玄関先にて待機しています』
「あと６０秒待て！」
『ラージャ』

頼む、間に合ってくれ……！
その想いを胸に、走ってアーバレストの元へ急ぐ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

Ｄｕｅｌ．３　セーブ・ザ・ライフ

「アル！」
『お待ちしていました、軍曹』
「御託はいい、起動しろ！」
『ラージャ』
「バイラテラル角３．５に設定、モードマスター４！」
『了解、バイラテラル角３．５。モードマスター４』
「ラムダドライバ起動、最大戦速で向かうぞ！」
『ラージャ、起動完了。行けます、軍曹』

全力で跳ぶイメージで爆発させ、アーバレストが大きく跳躍する。
着地地点は約７０メートル先。
バシャアッ、と派手に飛沫が跳ねる。
そんな事お構い無しに次々と跳躍する。

『味方複数確認。恐らく第六駆逐艦隊とそのお付きかと』
「状況は！」
『芳しくありません。味方照合、天龍大破、龍田中破、第六駆逐艦隊の方々は中破とはいえ無傷です』
「ちぃっ！敵艦隊は！」
『敵艦、駆逐艦二隻は撃破しているようです。軽巡洋艦小破、重巡洋艦軽度の損傷見られますがほぼ無傷。戦艦に至っては無傷です』
「マズイな・・・・・距離は？」
『距離あと１６００』
「まだ遠いか・・・・・！この距離で有効性の高い武装は？」
『ＧＥＣアサルトライフルならば牽制にはなります』
「照準補正は任せた！」
『ラージャ』

右手に装備していたボクサーを懸架、ＧＥＣと交換する。

大雑把に狙いを定め、アルによる補正をかける。
そして引き金を引き、バラバラと弾をばらまく。
軽巡洋艦に着弾確認、中破か。
重巡洋艦には小破、戦艦には僅かながら傷を負わせる事ができた。
だが、まだ距離がある。
急げ……!!

「ちっ、くしょー……そろそろヤバイぜ……!!」
「天龍ちゃん、無理しちゃダメよー？只でさえ大破しているんだから……」
「わかってるさ……でも、チビ共は沈ませはしねぇ……!!」
「天龍さん……！」
「……？風を切るような音が……!!」
「何だぁ!?」
「援軍なのです!?」
「いや、探針には反応がないね……何処から……？」
「お前ら、油断すんなよ！また来るぞ！」

天龍、龍田が駆逐艦たちを守るように前に出る。
だが深海棲艦は無慈悲に砲撃を繰り返す。
続く砲撃に直撃弾が含まれており、天龍は沈む事を覚悟する。

「(ちくしょう・・・・・まだ、終われねぇのに・・・・・!!)」
「天龍ちゃんっ!!」

来るであろう衝撃に目をつむる天龍。
だが、しばらくしても衝撃がこない事に疑念を持つ。
恐る恐る目を開けると、目の前に見慣れない巨体が自らを守るように立ちふさがっていた。

「ん、な・・・・・!?」
「私たちを守ってくれたの・・・・・?」
「お、おっきい・・・・・!」

――――間に合ったか。
宗介はふぅ、と息を吐き安堵する。

「お前たち、聞こえているな？」
「お、おう！」
「ならば転身して撤退しろ！俺が殿を努める！」
「ちょ、ちょっと！あなたは誰なの!?」
「俺か。俺はスペシャリストだ！」

ジャコンッ、とボクサーのハンドガードを引き排莢する。
息を整え、ズドンッ、ズドンッ、と連射して牽制を続ける。

『ボクサー、残弾５』
「無駄遣いは出来んな・・・・・仕方あるまい、ダガーを使うぞ！」
『ラージャ。左腋下ハッチ開放、ダガー排出』
「当たれっ!!」

やや回転がかかったダガーは吸い込まれるように軽巡洋艦級に突き刺さり、爆発。
それが致命傷になったのか、ゆっくりと沈んでいった。

「す、すげぇ……あんな簡単に沈めちまうなんて……」
「只者じゃないわねー……このまま引き下がるの、天龍ちゃん？」
「はは、そんな訳ねぇだろ。誰だが知らねぇが助けに入ってくれてんだ、おれたちだけ尻尾巻いて逃げるなんて柄じゃねぇ！お前ら、アイツを援護するぞ！撃てぇ!!」
「しっかり援護するのもレディーの努めよね！」
「当てちゃうんだから！」
「外しはしない……!!」
「なのですっ!!」
「押し返してあげるわぁー！」

後ろから援護砲撃が続々と放たれる。
その隙にＧＥＣに素早く持ち替え、狙いを定める。

「負けるかよぉっ!!」
『……ワーニン、敵艦隊援軍反応あり。距離５８』
「何ッ!?」
『戦艦３、重巡洋艦２、軽巡洋艦１。これが本命のようです』
「つまりあれは偵察部隊か……!」
『肯定。現戦力では防御するのが精一杯かと』
「くそっ……!守りきれるか……!?」

本命の敵艦隊による砲撃が始まったようだ。
次々と砲弾が着水し、味方艦隊を追い詰める。
こちらはラムダドライバを最大出力まで解放し、防御に徹する。

『軍曹、残り３６０秒です』
「３６０秒切るとどうなる!」
『恐らく沈みます』
「くそっ、このままでは……!!」
『ここまでは予想の範囲外です、軍曹。即時撤退を推奨します』

「逃げ切れると思うか？」
『恐らく不可能かと』
「ふっ……笑えんジョークだ！」
『ええ、私もそう思います。ですが存分に足掻いてやりましょう』
「当然だ！」

徹底抗戦開始から数分。
いよいよこちらの弾薬が底を尽きつつあった。
ＧＥＣの弾は切れ、頭部チェーンガンも残弾０。
ダガーも投げ尽くし、グレネードも残り一つ。
残す頼みは残弾５のボクサーと単分子カッター。
味方艦隊もそろそろ弾薬が底を尽くかもしれない。

「くっそ……いよいよヤベェ……」
「残るは薙刀くらいねー……」
「私たちは魚雷があと二、三発……」
「マズイ……かなり消耗している……アル、いい方法はあるか？」

『敵に向かって白旗を振ってみては？』
「それはいい考えだ……だがまだ却下だ。それは最終的に手がつけられん状況になってからだな」
「はっ、あんたの相棒？おもしれぇ事言うじゃねぇか」
『褒めていただき恐縮です、天龍殿』
「んで？どうすんだよ」
「奴らは良い線行って小破だな……やはり俺が囮になろう。お前たちは逃げるんだ」
「そ、そんな事出来ないのです!!」
「そうよ！誰かは知らないけどここまで一緒に戦ってくれたじゃない！」
「全員生きて帰ることは不可能だ。だからこそ、君たちには生き残る資格がある」
「ま、チビ共は生きて帰すさ……あの野郎に何言われてももう知らねぇや」
「そうねー、天龍ちゃんと同じ意見よ？」
「なら……少し付き合ってもらってもいいか？」
「良いねぇ、燃えてきた！」

ボクサーを懸架、単分子カッターを引き抜く。
ここからは、格闘戦だ。

せっかくだ、最後まで戦ってやる！

「なぁあんた、沈む前に名前教えてくれよ」

「俺か。俺は相良宗介、軍曹だ！」

だがこの時俺たちは、とても心強い援軍が来るとは夢にも思っていなかったのだった。

まるで、その時を待っていたかのように。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

Ｄｕｅｌ．４　バトルシップの由縁

ギィン、と折れる音が海に響く。
いよいよ頼みの綱の単分子カッターが折れた。
かなりマズイ状況に陥っていた。
天龍は相変わらず大破、龍田も戦艦の砲撃により大破、しかも撃沈寸前。
駆逐艦隊も大破にまで追いやられていたのだった。

「はぁ、はぁ、はぁ」
『ボクサー、残弾０』
「ここまでか……！」
『ですが、諦めるつもりはないのでしょう？』
「当然だ」
「ねーえー、もう囲まれてるみたいよー？」

「はん、上等！チビ共にはこれ以上傷を負わせはしねぇ！」
「はわわ……天龍さん、無理しちゃダメなのです……！」
「大丈夫だ、心配すんな電。おれたちは沈まねぇ。おれがそんな事させねぇよ」
『とにかく我々は防御に徹します。砲撃可能な方は片っ端から砲撃してください』
「了解、やるだけやってみるよ」

その後すぐにラムダドライバを発動するために集中する。
とにかく砲撃が直撃する前に瞬間的に守る事を意識する。
そして、奴らも砲撃を繰り返す。

「暗イ海ノ底ニ沈ミナサイ……！」
「ぐっ、いかん！」
「マジかよっ!!」
「各艦、被害状況は!?」
「も、もうダメ……！機関がやられて動けない……！助けて……っ!!」
「待ってろ暁！今行くからな！」
「天龍さん5時方向っ!!」

「んなっ――――」

万事休す。

ここからではラムダドライバの効果も薄い。

もう、無理か……!!

「主砲、斉射！ってぇー!!」

その声から少し遅れて、何者かの砲撃が敵艦隊の砲撃を撃ち落とした。

なんだ今のは！

砲撃を撃ち落とすなぞほぼ不可能に近いというのにそれを平気でやってのけたとい

うのか!?

「ギリギリ、間に合ったようだな」
「ええ、本当にギリギリです。大丈夫でしたか？」
「は、はは・・・・・これで大丈夫に見えたらすげぇよ・・・・・」
「ゆ、夢でも見てるの・・・・・？」
「ハラショー・・・・・こいつは・・・・・現実みたいだよ」
「暁、ほっぺたつねってみる？」
「い、いいわよ別に・・・・・」
『これは・・・・・嬉しい誤算、というものでしょうか』
「そのようだ・・・・・識別は？」
『照合完了。大本営直属艦隊所属、戦艦大和及び武蔵』
「まあ、そういう事だ。無事か？」
「ここは私たちが引き受けます。早く撤退を」
「わりぃな、大和さんよ」
「いえ・・・・・ですが元帥の悪い予感があたっていましたね」

「悪い予感、なのです？」
「今日何処かで誰かが轟沈するんじゃないか、と心配されていたのだ。そういう悪い予感ほどよく当たる」

思いもよらない援軍に、天龍らは安堵した様子だった。
そして、その状況を良しとしなかったのか、敵艦隊は撤退していってしまった。
とりあえず、波は乗り越えたようだ……。

『敵艦隊、撤退していきます。状況終了のようです』
「……ふぅー」
「助かったー……だけどなんでわかったんだ？」
「この子たちのおかげです」

大和がそういうと、大和の肩に小さな小人のような生命体が乗っていた。
羅針盤のような物を持っているようだ。

「この子たちが力を貸してくれたおかげで、ここまで来れたのですから。それから……そちらの方には多大なる感謝を申し上げます」
「俺は……感謝してほしくてやった訳ではない。やるべき事をやったまでだ」
『素直に喜びましょうよ、軍曹』
「……アル」
『いえ、失言でした？』
「いや、お前の言う通りだ。その感謝の意、ありがたく頂戴しておこう」
「では、鎮守府に帰投しましょう。元帥がお待ちです」
「――――――ん？」

大和の一言で、天龍が立ち止まった。
その様子を見て大和がどうしたのかと問う。

「……なぁ大和さんよ、今なんて？」
「え？鎮守府に帰投しましょうって……」

「その次は？」
「”元帥”がお待ちです？」
「――――え”っ」

その後、ひとしきり叫んだ天龍と第六駆逐艦隊なのであった。
龍田は平静を装っていたが、若干動揺していたようだ。
そうしてしばらくして、鎮守府近海にまで戻ってきた。

「そういえばあなた方のお名前、聞いてませんでしたね。差し支えなければ教えていただきたいのですが・・・・・」
「了解した。自分は相良宗介。無所属だが軍曹だ」
『アル、です。よろしくお願いします、ミス大和』
「はい、よろしくお願いいたします。ところで・・・・・」
「なんだ？」
「その”カラクリ”、何なんですか？艤装もなしに浮けるなんて・・・・・」

「説明は後にさせてくれ。長くなる」
「わかりました」
『――――――軍曹』
「なんだ」
『彼女らの火力はあの鎮守府の方々と比べ物にならないほどです。練度がまるで違います』
「……だろうな」
『……彼女らが不憫でなりません』
「……お前もそう思うんだな」
『軍曹』
「なんだ」
『私はＯＳであり、人間とほぼ同じ知識レベルです。軍曹がいつか、私に”決めるのはお前だ”と言っていただいた時から、そうです』
「何が言いたい」
『今はまだ完全ではありませんが、ある程度の感情はあるつもりです。それをお忘れなく』
「……そうだな」

思ったよりもアルが頼もしいやつだった。
それも当然だ……アルは本編ラストバトルで自分を確立させたのだから。
そんな強い状態のアルが味方なんだ、頼もしくない訳がない。

「……礼を言う」
『……いえ』
「――――アル」
『はい』
「――改めて、よろしく頼む」
『ええ、こちらこそ。よろしくお願いします』

アルとの絆が結ばれた気がした。
とても、長い１日。

To be continued.

Ｄｕｅｌ．５　下されるジャッジメント

あの戦闘を終え、どうにか帰還した俺たち。
だが、港には見覚えのない男が立っていた。
あの太った男ではない。
見た目は初老の老人。
体格はがっちりとした軍人体型。
……なんだろう、何となくだがアニメにて登場していたカリーニンさんに似ている。
言うなればそう、カリーニンさんをさらに老け込ました感じだ。
……失礼かもしれないが。

「元帥、大和及び武蔵帰投しました」
「うむ。よく帰ってきた」
「それから、救出に向かってくださったカラクリにも同行していただいています」

「ふむ。ざっと八メートル程か」

KOEEEEEEEEEEEEEE!!（素）

ざっと見ただけでわかるのか!?

そういうものなのか!?

とりあえず名前がわかるまではカリーニン（仮）さんとでもしておこう。

正直チビるかと思った。

「――さて、この者と話がしたい。できるか?」

「わかりました。相良さん、大丈夫ですか?」

「問題ない。アル、コックピット開放」

『ラージャ』

搭乗姿勢に移行し、コックピットハッチを開放させてアーバレストから降りる。

そして、港で面と向かって話す形になる。

「まず、お主の名前を聞こうか」
「はっ、自分は相良宗介であります。無所属ながら軍曹であります」
「ふむ、ワシは御堂林之助。大和が言っておったように、元帥だ」
「はっ、元帥殿」
「畏まるでない。楽にせぇ」
「了解しました」
「さて、早速だが本題に入るとしよう。歩きながらだが構わんか？」
「構いません」
「それでは、あの阿呆の顔を拝みに行くとするかの」

歩きながらこれまでのいきさつを話していた。
俺がここに来た理由、ここの鎮守府の内部事情、それから以前より元帥殿は内偵を入れており、来るべき時に備えていたそうだ。
えらく準備が良いようで……。
だが話によるとほとんどの鎮守府に内偵者を入れているそうだ。

抜かり無さすぎないか？
実質元帥に監視されているようなものだ。
……実際問題、内偵者は誰もわかっていないようで、どの提督も気づいていないらしい。
知っているのは元帥だけ、というのがまた恐ろしいな……。

「いやはや、趣味の悪い扉だのう」
「自分もそう思います、元帥殿」
「慣れたようだな、この環境にも」
「いえ、まだ存じ上げない事ばかりです」
「そうか。まあこれから知っていけばいい」
「了解しました」
「さて……野村提督！居るか！」

元帥殿が扉に向かって声をかけると内側がドタバタと騒がしくなる。
まさか元帥殿が来るとは思っていなかったのだろう。

慌てようが目に見える。

《な、何のご用でしょうか元帥!?》

「なに、ちと暇潰しに話をしたい。入れてくれ」

《か、かしこまりましたぁ!!》

「さて……大和、武蔵」

「はい、元帥」

「はっ」

「何かあった時は頼むぞ?」

「元帥の仰せのままに。必ず守ります」

そうして部屋に入ると、薄ら笑いを浮かべた野村がいた。

焦っているのか、脂汗が目立つ。

「な、何のご用でしょうか……?」

「本題から入らせてもらうが……鎮守府の運営についていくつか質問があってな」

「は、はぁ」

直後元帥殿の目付きが変わり、猛禽類を彷彿とするギラリとした目付きに変わった。
ヤバイ、これは本当にカリーニンさんかもしれない。

「――――貴様、ここの資源量が明らかに多すぎるぞ。何故なのか説明してもらおう」
「そ、それは」
「節約のため、とでもほざいてみろ。どうなるか知らんぞ」
「は、はひっ!!」
「そもそもここは戦果を上げているはずだがどうも消費している資源量が釣り合わん。となれば、故意に修復させなかったり、補給させなかったりと疑いが出る訳だ。何か弁明はあるか?」
「そ、それはですね……」
「――――まあもっとも、ネタは既に上がっているがね」
「!?」

そういうと元帥殿は大和に指示し、一つの封筒を差し出させた。

あれは何だ？

「ここに、全ての真相が記されている。もちろん、貴様のしでかした所業も、な」
「な、何を仰っているのか……わかりませんな……」
「あくまでもシラを切る気か。まあそれも良い、が。貴様のしでかした所業は到底許される事ではない」
「わ、私はただ日本を思ってですね!?」
「ほう、日本を思って艦娘に手を出すのか。大層なご身分だな？」
「そ、それは……」
「もはや弁明の余地無し、かの。では現時点をもって貴様を捕縛する。武蔵」
「ああ」
「な、何を――ぐぇぇ!?」

即座に背後に回り、右腕を後ろに固めて捕縛した武蔵。
情けない声を出してその場に倒れる野村提督。

「な、何をしているのかお分かりですか元帥!?今の日本に提督を努める者は少ないと存

じているはず!!」
「黙れ愚か者。貴様が言っておったように提督にも替えはいくらでも利くのだ。貴様なんぞ不必要だと判断すればいつでも切り捨てる事が出来たのだから」
「お、横暴ですぞ!!」
「――――武蔵、黙らせぃ」
「うむ」
「ぐぇっ」
「よろしい。さて相良とやら」
「は、はっ!」
「先程ああは言ったが実際数は足りんのだ。人手不足での」
「はぁ・・・・・?」

何なんだ、全く意図が読めない。
いったい何をさせようとしているんだ?

「相良よ、お主さえ良ければ提督やってみんか?」

「――――は？」
「ほほ、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をするな。まあ当然か。だが悪くない状況だと思うぞ？お主は彼女らを助け、信用をある程度得ておる。さらにお主には住む場所がなく、そこのカラクリの弾薬もからっけつ。ここでなら、補給出来るぞ？」
「そんな些細な事で信用を得られるものでしょうか」
「実際お主は彼女らの事を思い飛び出した。それで十分だがね」
「はぁ……」
「まあ、問題は山積みだろうがな。それはお主の手腕に期待しよう」
「……はいと答えるまで引き下がるおつもりはないと」
「まぁの。実際、お主の持つ技術は脅威だ。そんな技術をそばに置きたい輩も居るだろうて」
「だからここに着任しろ、と？」
「そういう事だ。観念したか？」

何だろう、外堀を埋められて攻められているようなこの感覚。
逃げ道なんぞハナからなかったんだな、と思い知らされた。
……まぁ、俺がどうにかできるとは俺自身思えないがやれと言われているんだ、や

るだけやるさ。

「……わかりました。慎んでお受けします」

「よし、では相良軍曹……いや相良少佐。今後は頼むぞ？」

「――――ん？」

今何て？

少佐と言ったか今？

「ああ、階級か？そりゃあお主、多大なる貢献をしたじゃろ？それに軍曹で提督なのは格好つかんだろうに。謂わば褒賞じゃ。これからも上手くやれぃ」

――――二階級特進どころじゃなかったぁぁぁぁぁ!?

To be continued.

Ｄｕｅｌ．６　トーキング・フォー・ミー

ＡＭ６：３０。
執務室にて早起きしてやってきたであろう吹雪が書類の整理をしていた。
「ふぅ。今日はちょっと書類が多そうね……提督、大丈夫かなぁ……？でも、早起きしてわかりやすいように書類をまとめたからきっと大丈夫だよね、うん！」
そんな独り言を言っていると、僅かに開いた扉の隙間から何かが投げ込まれる。
それの形は、やや小さめな円柱状の物体。
「……？何の音――――――ぴゃあああああ!?」

円柱状の物体から発せられたのは煙幕。
それもかなり濃い煙だ。
予想外の状況に吹雪は混乱する。

「なっ、なにこれ！煙たっ―げぇっほ!?げほっげほっ!?」
「――――動くな、手を頭に膝をつけ」
「――ッ!?」
「ここで何をしている――――って、吹雪か。何故ここにいる？」

犯人は言わずもがな、相良。
つい先日提督となった男だ。
頭を下げる相良だが、吹雪は顔を真っ赤にして怒りだす。

「んもーっ!!提督、何考えてるんですかっ!!」
「すまない、てっきり仕事部屋に不審者がいるのかと思いスモークグレネードを」
「そもそも不審者なんて入れませんよぉ!!」
「だ、だが万が一という事もだな」

「万が一も億が一でもないですって!!いいですか!?私はですねぇ！」

まくし立てる吹雪。
そんな様子も露知らず、新たな艦娘が執務室に訪れる。

「なんだよ朝っぱからうるせぇなぁ」
「あっ、聞いてくださいよ天龍さん！提督が！」
「初日と同じように煙玉投げ込んだんだろ？相変わらず手際良いよなぁ」
「あれぇー？私がおかしいのかなー？」
「まぁ冗談は置いといて、だ。朝っぱからよくやるぜ提督」
「む、すまない。ところで天龍は何を」
「ああ、昨日頼まれてた遠征の報告だ。着任直後にまさか負傷してた皆休ませてアンタが哨戒に行っちまった時は驚いたぜまったく……」
「負傷兵を前線に出せるわけがないだろう。大人しく治療を受けるべきだ」
「まぁそりゃそうだけどよ……アンタが来てからちょっとは変わったよな、ここも」

「だといいが。それでも信用はされていない事には変わりない」
「だよなぁ……おれ達はアンタを間近で見ていたから信じれるが他のやつらはなぁ……」
「あの！まだお話は終わってないんですけど!?」
「ああ、忘れてた」
「ひどいっ！」

執務開始から数時間後、ＡＭ１０：２０。
秘書艦は電が務めている。
午前中に終わらせるべき書類が済んだのか、ペンを置いてぐっと伸びる相良。

「お疲れ様なのです、司令官さん」
「ああ。まだ色々と不慣れな所はあるが、これからだろうな」
「そうなのです。ゆっくりと一つずつこなしていきましょう！」
「――――ところで」
「？」

「君は怖くないのか？自分、いや人間が」
「あの頃は痛いことばかりでしたけど……司令官さんが来てからはちょっとは笑えるようになった気がするのです。だから、今はちょっぴり怖いぐらいなのです」
「……そうか」
「司令官さん、他の艦娘とは仲良くなれそうです？」
「現状では難しいだろうな……未だに戦艦や空母、重巡……いやほとんどの者とはコンタクトが取れていないからな」
「司令官さん……」
「心配いらん。俺は専門家だからな」

今後の方針を考えながら話をしていると、ふいに執務室の扉が数回叩かれる。
その直後、おっとりとした口調の声が聞こえる。

〈提督ー、いるかしらー？〉
「ああ、肯定だ。誰だ？」
〈私よ、龍田よー。ちょーっとお話したいなーって思ったんですけどー、大丈夫かしらー？〉

「問題ない。入ってくれ」
〈はーい〉
返事を返すなりすぐに扉を開けて入室する龍田。
「それで、用とは？」
「えっとねぇ、提督は着任したあと皆に挨拶したかしらーって思ったのよー」
「……そういえばまだしていなかったか」
「この際だしお昼に挨拶してみたらどうかしらー？」
「そう、だな。了解した、では１２００に行うとしよう」
「わかったわー。私からもそう伝えておくからー」
「すまないな」
「でもね提督、一つ気をつけて。一筋縄じゃいかないからー」
「……了解した」
一筋縄ではいかない、そう一言言い残して去っていった龍田。

それはすなわち、この状況が如何に打開しづらい状況か、という事。
その一言で、いかに難しいのかが伺える。

「アル、聞こえるか」
『イエス、サージェント』
「道のりは長そうだ」
『ですが任された以上は何とかするのが我々でしょう』
「そうだな。俺たちには撤退という文字はない」
『その通りです、軍曹。我々も奮闘しましょう』
「それでだなアル、今後の話なのだが――――」

それから日が落ちて。
すっかり夕方になってしまった。
今後の方針をどうするのか話し合っているうちに昼も過ぎてしまい、これはマズイと自覚する。

「――――しまった」
『この時間帯だと夕飯でしょうか』
「夕飯時に行くのもな・・・・・」
『早いうちがいいかと』
「・・・・・わかった。アル、少し空ける。ここを任せてもいいか？」
『問題ありません、サージェント』
「では、行ってくる」

今でなくとも、いつか。
俺たちに話してくれるだろうか――――？

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

Duel・7　ビッグ7のプライド

――――――さて。

食堂の出入口までやってきた訳だが、中からひしひしと剣呑した雰囲気が伝わってくる。

あからさまに歓迎されていないだろう。

しかし、ここでまごついている訳にはいかない。

そういう物だと割りきり、扉を開く。

「――――ッ！」

「……。」

「――、――――。」

やはり。

警戒されているな。

射殺さんばかりに視線が刺さる。
これは……参ったな。
さて、どうするか。
まぁ突っ立っている訳にはいかないので、鳳翔と呼ばれる艦娘の元へ歩いていく。

「――――貴方にお出しする物はありません」
「……そうか。すまない、邪魔をした」
「ええ。例え提督が変わったとしても貴方がここに居られると不愉快な子がいますから。お引き取りください」
「……了解した」

正に取りつく島もない、と。
しかし食料問題は致命的だ。
一体何をどうやらかせばこうなるんだ……。
仕方がないので執務室に戻る事にする。

道中、確か机の中に携帯糧食があったはずと思い返し、自然と歩みが速くなる。

「……はぁ。しばらくはこれで我慢、だな」
『どうされました、軍曹？』
「何でもない。ただ”取りつく島もない”だけだ」
『致命的ですね』
「さて、どうするかな……」
『軍曹、いっそのこと彼女らをしばらく休養させてはいかがでしょう』
「それも手だな。やってみるか」
『こちらから館内放送をかけておきます。少し休まれては』
「そうさせてもらう。すまないなアル」
『いえ』

しかし……疲れた……。
少し休むか……。

ｓｕｂ－ｓｉｄｅ

駆逐艦の奴らを相手にしているとふいに館内放送が流れ出した。

声は少し機械的で、しかし何処か人間らしさがある。

確か提督の相棒の”アル”っったか。

そう思考を巡らせていると、”貴女方には無期限に出撃を停止、休養を取っていただきます”とだけ言い、館内放送が切れた。

どういう考えしてんだ……？

「あの、天龍さん」

「ん……おう」

「司令官さんは、何を考えられているのでしょうか……」

「確かに、な。休ませてもらえんのはいいがその間の補給とか警備とかどうすんだ……？」

「しかもいきなり、だものね」

「流石にレディーの私にもわからないわよ……」

「ま、知るのはただ提督一人って訳だな。龍田、行くぞ」

「わかったわぁ。天龍ちゃんは心配性ねぇ」
「ばっ！ちげぇし！」
「はいはい」
「天龍さんは素直じゃないのです」
「わかってんよ、そんな事・・・・・」

ｓｕｂ－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、あれから一時間程経った。
とりあえず今後の方針としては、”補給”と”修繕”だろう。
補給の件は俺がアーバレストで出撃して回収できれば上々。
修繕に関しては先日工廠に出向いた際、”明石”と”夕張”という工作艦とその”妖精”と呼ばれる存在に会った。
彼女らはそれほど前任とは関わっていないそうで、いつの間にか変わっていたので大層驚いたそう。
そうして話をしていく中で、彼女らはアーバレストに興味を向けた。
どうやらかなり気になるようで、目をかなり輝かせていた。

せっかくなので、アーバレストの技術提供をする代わりに、無理のない範囲での鎮守府内外の修繕をお願いした。
彼女らは二つ返事で答え、”量産機作ったらぁ!”と息巻いていたのは余談だ。

「アル」
『イエス、サージェント』
「現在の修繕状況を報告しろ」
『現在入渠施設は３０％程まで修繕終了。宿舎施設は４５％まで修繕が終了しています』
「後は」
『食堂施設及び工廠施設はほぼ全ての修繕を終了しています。』
「そうか。さて、どうしたものか……」
『――サージェント。客人です』
「ん?」

その言葉の後、扉が開かれ一人の長身の女性が入ってくる。
ツカツカとヒールの音を立て、目の前まで来ると。

「長門型戦艦一番艦、長門だ。貴様が件の新任か」
「肯定だ。まだ4日しか経っていないが、よろしく頼む」
「先駆けて言っておくが、馴れ合うために来たわけではない」
「……というと？」
「貴様が提督にふさわしい人材か、見極めさせてもらうぞ。こちらとしては認めた訳ではないからな」
「なるほど。てっきり拳の一発や二発くらい飛んでくると思ったのだがな」
「……私とてもう子供ではない。それぐらいの簡単な判断はできる」
「それで、話はそれだけか？」
「いや、まだだ」
「……言ってみろ」
「貴様は私たちを嘗めているのか？」
「……」
「放送を聞かせてもらったが、何なのだあの放送は。無期限に出撃を停止だと？その間の補給はどうするつもりだ？それに、戦う事が私たちの役目だ。それを無くすとはどういう考えをしている？お前は、私たちを否定したいのか？」

「……説明には時間がかかる。とは言っても納得はしなさそうだが」
「当然だ。あのまま嘗められたままはいそうですか、と身を引ける訳がないだろうが！」
「説明不足で申し訳ないが、これだけは言わせてもらう。お前たちはもう傷つかなくて良い」
「……何？」

うぉぉ、とんでもないくらいに睨まれている。
明らかに”何言ってんだこいつ”みたいな目で睨んでいる。
まぁ唐突に傷つかなくて良いなんて言われたらそりゃ疑念を向けられてもおかしくはない。
だが、その言葉は事実だ。
彼女らが休養を取っている間は俺とアルで出撃する。
これは決定事項だ。
むしろ何故女性である彼女らが傷ついて、男性である俺たちが引きこもっていなければならん。
確かに戦えるのは彼女らだけかもしれないが、それでもやりようはあるはずだ。
とにもかくにも、タダでさえ前任に傷つけられた彼女らを今すぐには戦場には出せな

い。
精神的なケアが必要だ。

「……まぁいい。だがその言葉、虚無に帰すなよ」
「了解だ。君たちは（戦力的に）魅力的だからな。ケアをしっかりとしつつ、いつの日か共に戦ってもらおう」
「――ッ!?」
「どうした？」
「……いや、何でもない。では失礼する」

若干早足になりながらも退室していった。
早足になるぐらいここにいるのが嫌だったのか……。
これは早々に問題解決に向けてしっかりしないとな。

「……アル」
『イエス、サージェント』

「明石と夕張に連絡を取ってくれ。出撃する」
『了解。単独任務になるためより慎重な行動を推奨します、軍曹』
「わかっている。弾薬も限られているからな」

ｓｕｂ―ｓｉｄｅ

――連絡を取ってくれ――出撃……。

「……聞いたか？」
「聞いたわぁ」
「バッチリ聞こえたのです」
「出撃って言っていたね」
「でもさっき無期限にって言ってなかった？」
「……龍田」
「ええ、まさかとは思うけどこれ……」
「提督が、出撃するってのか？」

「それは無茶じゃないのかな。私たちのように艤装があるわけじゃないんだろう？」
「そのはずよ。司令官に艤装だなんて……」
「だが出撃するってんなら話は別だ。工廠にいるかもな」
「それじゃあ向かいましょうかぁ～」
「おう！」

盗み聞きをするつもりはなかったんだが、聞いてしまった。
あの長門さんを若干ながら納得させたのか……。
やっぱすげぇな、提督。
出撃、という単語を聞いた瞬間おれたちはすぐに話し合い、先回りして何をするのか調べる事にした。

「……青葉、聞いちゃいましたっ」

ｓｕｂ－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ